

# 松永耳庵の茶会記録に見られる「田舎家」に関する記述

Descriptions about the 'Inakaya' (Country Cottage) in the Tea Party Records by MATSUNAGA Jian

## キーワード：

松永耳庵  
茶会記録  
田舎家  
近代和風  
仰木魯堂

近代数寄者による茶室の一種として、「田舎家」と呼ばれるものがある。本稿では近代数寄者の茶会記録として、松永安左エ門（耳庵）のそれを取り上げ、その「田舎家」の描写と意味するところを考察する。松永は自身も「田舎家」の所有者であることから、それを通じた美意識の共有が、益田鈍翁をはじめとして原三溪、仰木魯堂、塩原策らとの茶会から読み取れる。

## 1. はじめに

近代和風住宅の形成において、近代数寄者と呼ばれる人物たちが果たした役割の大きさはよく知られている。近代数寄者とは、明治中期から昭和初期にかけて、政財界に重きをなす富裕層によって形成された茶の湯を趣味とする集団である。近代数寄者の茶会等の交流は、和風住宅や別荘で行われたが、それらの交流を行う場所や建築物は茶題や催しの性格とも関係し、彼らの趣味を示す上で重要な意味があった。

近代数寄者による茶室の一種として、「田舎家」と呼ばれるものがある。一般に田舎家とは、古い民家を移築し、手を加え、茶室や別荘として改修したものと考えられるが、筆者はこれまで、近代数寄者たちの茶会記録に基づいて、こうした「田舎家」について考察<sup>1)</sup>、1) 明治中期から昭和戦前期にかけて多くつくられ、そのピークは関東大震災以後、昭和初期であったこと、2) 建築主としての中心人物は益田孝(鈍翁)で、彼と交流のある数寄者に広まったこと、3) 形式的な茶の湯を脱し、近代数寄者自身が自分で探し、自分でつくる新しい茶席の様式であったこと、などについて述べてきた。

しかしながら、前稿までの考察では、1937(昭和12)年に他界した高橋義雄(箒庵)の記録までしか扱っていなかった。本稿ではこれに続く近代数寄者の茶会記録として、松永安左エ門(耳庵)のそれを取り上げ、その「田舎家」の描写と意味するところを考察したい。

「田舎家」について書かれた文献および先行研究は、前稿を参照されたいが、茶人としての松永安左エ門を論じた尾崎直人氏によるもの<sup>2)</sup>を特に加えたい。

<sup>1)</sup> 拙稿「近代数寄者の茶会記録に見られる「田舎家」に関する記述」『日本建築学会計画系論文集』第78巻687号、pp.1151-1160、2013.5等

<sup>2)</sup> 尾崎直人「松永安左エ門茶の湯事始め 安左エ門から耳庵へ」『松永コレクション』福岡市美術館、1999、pp.5-23、同「耳庵・松永安左エ門 その人と茶の湯コレクション」『没後30周年記念特別展 松永耳庵コレクション展』福岡市美術館、東京国立博物館、2001、pp.175-210

## 2. 茶会記録と「田舎家」の出現回数

松永安左エ門(1875(明治8)年～1971(昭和46)年)は、1934(昭和9)年、数え60歳のときに茶事に招かれたのを嚆矢とし、翌昭和10年、なかば計略にかけられるようにして自らも茶事を催すようになり、茶の湯にのめりこんでいった。茶の湯に入った年齢の耳順に因み耳庵と号した。耳庵はわずかの期間で晩年の益田孝(鈍翁)と最も交流する一人となり、原富太郎(三溪)の厚い知遇も得つつ、彼らに続く世代の後継者と、自他共に目されるようになった。

この戦前から戦中を経て戦後に至る時期に、松永耳庵は雑誌『日本之茶道』<sup>3)</sup>に精力的に記事を書き続け、これらをもとに『茶道三年』、『茶道春秋』、『わが茶日夕』という書物がまとめられた。これらのうちには、この時期に継続的に書き継がれた数少ない近代数寄者による茶会記録を含んでいる(耳庵は戦後も長期間にわたり茶の湯に親しみ著作も残しているが、日時や場所等が正確な記録性は減じてしまう)。そこで、『茶道三年』、『茶道春秋』、『わが茶日夕』における茶会および紀行の記事を通覧し、「田舎家」もしくは類似の記述のある箇所(以下、「田舎家」という)を抽出した。なお語の抽出は、景観描写や歴史的説話などにおいて用いられた場合は原則として除き、茶席として当時現存していた建築物についての表現として用いられた場合に限った。「田舎家」の出現回数は次の通りである。

『茶道三年』<sup>4)</sup>

1934(昭和9)年5月から1938(昭和13)年5月まで(4年1ヶ月)にわたり、このうち「田舎家」の記述は38回<sup>5)</sup>ある。(表1)

茶の湯を始めた時期のいわば勉強ノートであり、特に1935(昭和10)年からの3年間で急速に茶の湯に傾倒し

<sup>3)</sup> 『日本之茶道』は1930年から1953年まで中断を経つつ刊行された。戦後の1945年から数年間は『日本の茶道』と称していた時期がある。これらに初出となった松永安左エ門の記事に関しては、前掲『没後30周年記念特別展 松永耳庵コレクション展』pp.211-222に詳細なリストがある。

<sup>4)</sup> 松永安左エ門著、粟田有聲庵編『茶道三年』上中下巻、飯泉甚兵衛、1938

ていく様子がわかる。

#### 『茶道春秋』<sup>6)</sup>

1938 (昭和13) 年6月から1942 (昭和17) 年8月まで (4年3ヶ月) にわたり、このうち「田舎家」の記述は19回ある。(表2)

茶説編 (上巻) と会記編 (下巻) に分かれ、後者がここでの分析対象となる。

#### 『わが茶日夕』<sup>7)</sup>

1942 (昭和17) 年11月から1949 (昭和24) 年8月まで (6年10ヶ月) にわたり、このうち「田舎家」の記述は6回ある。(表3)

終戦を挟んでの激変する世相のなかで、茶会全体の回数が減っている時期にも、茶への関心が持続し、むしろその社交性よりも思想的省察に傾倒している様子がうかがえる。

3つの書物を通してみると、15年間にわたり、「田舎家」の記述は計63回 (類似、関連の表現を含めば71回) 出現する。

### 3. 茶会記録に見る「田舎家」の描写

表1～表3を通覧すると、特定の「田舎家」が頻出することがわかる。出現回数や記述が目立つものについて個別に見ていきたい。

#### 松永安左エ門別邸、柳瀬荘内、埼玉柳瀬

まずは他ならぬ松永自身の別邸、柳瀬荘内の「田舎家」が挙げられる。1935 (昭和10) 年に栗田常太郎 (天青、有聲庵) によって「時代ある萱葺の大家屋」<sup>8)</sup> と描写されるのが『茶道三年』での初出となるが、耳庵によって詳しく書かれるのは翌1936 (昭和11) 年に益田鈍翁を招いたときのことである。

初めは本屋へも上る気は無かりし様に見受けられしが、庄屋風田舎家が気に入り長座せられ (中略) 田舎家の大なるには、なかゝゝお気に入り、之は今日最

<sup>5)</sup> 『茶道三年』および次に掲げる『茶道春秋』、『わが茶日夕』のなかから、日時と場所および著者と出会った人物が記述から特定できる茶事、催事および交流の回数を示す。また、同所、同主人で連日にわたって行われた茶会は全日で1件としてカウントし、同日、同敷地内の複数の茶室で行われた茶会は全体で1件としてカウントした。また『茶道三年』には高橋箒庵、秦秀雄、粟田天青による、『茶道春秋』にも藤原銀次郎、横井飯後庵らによる、耳庵が参加、あるいは主人となった茶会記がいくつか掲載されており、これらも件数に含めた。

<sup>6)</sup> 松永耳庵著、栗田常太郎編『茶道春秋』上下巻、日本之茶道社、1944

<sup>7)</sup> 松永安左エ門『わが茶日夕』河原書店、1950

<sup>8)</sup> 前掲『茶道三年』下巻、p. 附録 2-12

も頭を打たれたる一なりと仰せあり、此次ぎには此大炉の辺にてこそ、飯と茶とを饗してほしいと言はる。…明治初年の百姓一揆が此家の柱に疵をつけしと説明せしに、軽井沢の自分の百姓家も会津戦争の弾丸が痕ありとの話も出た。<sup>9)</sup> (昭和11年6月)

ここでは本席となった燕庵写し小間、耳庵を出た後、「田舎家」で鈍翁がくつろぐ様子が書かれている。さらに家について古傷の話題も紹介され、時代を経た古民家を所有する者同士ならではの連帯感のようなものも感じられる。

この後、次のように鈍翁からの返礼状も紹介されている。

日本中田舎屋のいづれにも見ざる古式の御住居を拝観し轉た感に堪へざるはよきが 自身のものが急に嫌らひになりて羨しき念が深くなり候には困却致候<sup>10)</sup>  
(昭和11年6月)

この茶会において、松永耳庵は益田鈍翁の信頼を確信したと思われる。それは小間の茶室での茶事ではなく、「田舎家」でのことだったのである。斯界の第一人者たる鈍翁の礼状を受けて、松永の得意はいかばかりであったろうか。「田舎家」趣味を数寄者の間に広めた鈍翁が茶人らしいユーモアをもって自身の「田舎家」を誉めてくれたのである。最大級の賛辞と解してよいだろう。後述するように、この「田舎家」は松永が茶に親しむ以前の時期に入手、移築したもので、それを鈍翁から誉められたことは、茶に入る前からの素質を誉められたことに等しい。かくして、耳庵は鈍翁との信頼関係を「田舎家」を通して具現化したといえる。

さらに、翌1937 (昭和12) 年には藤原銀次郎を招き、その返礼状も紹介されている。

春雨の烟れる田園の景色壮大にして如何にも雅味を帯たる田舎家 之に配するに奈良の古宝 (中略) 故団氏に御見せ致候はゞ如何に御喜びにならるゝや又如何に御批評せらるゝや<sup>11)</sup> (昭和12年5月)

武蔵野の景観が開け、そこに「田舎家」が適しているという記述は、この別荘の表現として他所でも書かれるが、藤原らしいのは、団琢磨を引き合いに出している点だろう。団琢磨は1932 (昭和7) 年に血盟団事件によって世界しているが、生前は高橋箒庵によって「田舎家大尽」と呼ばれる程に各地に「田舎家」を建てた<sup>12)</sup>。藤原の記述はこ

<sup>9)</sup> 前掲『茶道三年』上巻、pp.105-106

<sup>10)</sup> 前掲『茶道三年』上巻、p.106。なお、この書簡は東京国立博物館に蔵され、前掲『没後30周年記念特別展 松永耳庵コレクション展』p.227に掲載されている。

<sup>11)</sup> 前掲『茶道三年』中巻、p.160

<sup>12)</sup> 高橋箒庵著、熊倉功夫編『昭和茶道記』1巻、淡交社、2002、p.503

れを踏まえたもので、益田、団らの下で、既に長年数寄者として茶に親しんでいる者ならではの贅辞といえる。誉められた耳庵としても、数寄者がこぞって建てた「田舎家」のなかでも特段のものとしたことで、数寄者のなかでも一廉の地位を占めたことを自覚したであろう。

### 益田孝別邸、掃雲台内「観瀾荘」、小田原

松永を茶道の世界に引き込んだ益田鈍翁の「田舎家」である。「田舎家」の代表格ともいえ、既に入手の経緯等については、高橋箒庵らの記述によって<sup>13)</sup>、数寄者の間では知られていたせいか、松永においては建物について改めての記述は見られない。

耳庵は最晩年の鈍翁と、短期間にきわめて親しく交流し、『茶道三年』、『茶道春秋』を通して小田原別邸掃雲台の記述は29回現れるが、そのうち9回でこの「田舎家」が用いられている<sup>14)</sup>。主屋に次ぐ頻度であり、やはり鈍翁は「田舎家」での茶を耳庵に伝え、その後継者として見込んでいたのである。

「観瀾荘」での描写で注目されるのは、建物前につくられた畑とそこで取れた作物を干したり焼いたりする風景である。「隼人瓜の棚は片付けられて、畑の大根と柿の枝などに釣り上げられたる儘に干したる」<sup>15)</sup>、「水菜が植ゑてあるが氷雨に濡れてる畑の景色」<sup>16)</sup>、「芋を焼くてふ煙淡く立ち上り」<sup>17)</sup>など、「田舎家」とともに見える菜園の景観がたびたび描かれ、それが「物の侘び真の田舎の隠居の住宅よろしく」<sup>18)</sup>、「寄附なる乾山焼芋の歌と共に、情趣溢るゝが如し」<sup>19)</sup>といったイメージにつながっている。

「田舎」の景観が茶題となることを示す描写といえよう。

### 塩原又策別邸内、箱根木賀

塩原又策は高橋箒庵の茶会記録によれば、1924(大正13)年から数寄者の茶会に現れ、1931(昭和6)年からは自宅に数寄者を招いて茶事を催している。箱根木賀の別荘については、1935(昭和10)年8月に箒庵が記しているが、ここでは「田舎家」の記述は見られない。他方、松永は同年11月に「本年初秋に工を終へられしと聞く、賤ヶ岳麓より移建されたる田舎家」<sup>20)</sup>と記していることから、

移築、改築の直後に訪れたことがわかる。後にこの「田舎家」は次のように描写されている。

此家の造りの蒼古豪壯。如何にも田舎郷土の住居として伊吹山麓より移された此古屋が箱根に根を卸したるもので、四百年前、賤ヶ岳の合戦には此家の主人も槍一筋と家来の十人も打連れて参加した面影が浮んで来る。<sup>21)</sup>(昭和12年8月)

「田舎家」の特徴は、歴史への想いを馳せる空間であることが、ここには見られる。一般に茶道具、茶室は旧使用者や旧蔵者の謂れが語られるが、「田舎家」はそれが無名のものであるだけに、より一層想像力を刺激する空間となるのであろう。内部は次のように書かれる。

母屋の太い丸形の大黒柱、黒く渡せる棟木の交錯の裡に、能く手入れしつゝある煤光る舞良戸と対照して寔に雅絶なる環境を作り出して居る。<sup>22)</sup>(昭和10年11月)

「黒く」「煤光る」という描写は、箒庵における「黒光り」と類似し、「田舎家」の誉め言葉と考えられる<sup>23)</sup>。

後年、松永は仰木敬一郎(魯堂)について回想した記事で、この建物に次のように触れている。

箱根の木賀に、塩原又策翁が田舎家を持って来て移築された。その家は有名な賤ヶ嶽の戦がありました、米原の奥の方にあったもので、昔の庄屋さんの家です。その家を改造と云うよりは、元のままの姿を残して作りました。近県の田舎家を別荘にしたものは、東京にもかなりありますが、塩原君の田舎家は、仰木魯堂君一人でなく、田中親美さんも田舎に行ってみて、これならよかろうと云うので、塩原君が箱根に持って来て建てたのです。これは今でも拝見が出来るのでありますが、仰木君が指図して建て、庭等も、仰木君の好みであります。一寸東京附近では見られない、気の利いた田舎家であります。<sup>24)</sup>(昭和32年)

ここから、仰木魯堂の建築的関わりがわかることに加え、田中親美も見立てに参画していたことがわかる。塩原が「田舎家」所有者の仲間入りをするに当たって、当代一流の目利きを用いて建築に臨んだことがわかり、どのような「田舎家」を所有するかが、数寄者間での評価につな

<sup>13)</sup> 前掲『昭和茶道記』1巻、p.547。この箒庵の記述については、前掲の拙稿で検討している。また、松永は観瀾亭もしくは観瀾亭と呼び、箒庵は観瀾舎と記しているが、ここでは『大茶人益田鈍翁』(やきもの趣味編集部編纂、学芸書院刊、1939)等から、最も一般的であったと思われる観瀾荘を用いた。

<sup>14)</sup> 掃雲台での茶会等については、拙稿「益田鈍翁小田原別邸・掃雲台の土地、建物、景観の復元的考察 その3」『常葉学園大学研究紀要・教育学部』第33号、pp.311-335で考察しているが、このときは『茶道春秋』における1件を落としていた。記して訂正する。

<sup>15)</sup> 前掲『茶道三年』中巻、p.80

<sup>16)</sup> 前掲『茶道三年』中巻、p.109

<sup>17)</sup> 前掲『茶道三年』下巻、p.54

<sup>18)</sup> 前掲『茶道三年』中巻、p.80

<sup>19)</sup> 前掲『茶道三年』下巻、p.54

<sup>20)</sup> 前掲『茶道三年』上巻、p.29

<sup>21)</sup> 前掲『茶道三年』下巻、p.41

<sup>22)</sup> 前掲『茶道三年』上巻、p.29

<sup>23)</sup> 高橋箒庵の「黒光り」の描写に関しては、前掲「近代数寄者の茶会記録に見られる「田舎家」に関する記述」を参照。他方、この建物に関しては、他の箱根の別荘と併せて、北大路魯山人が遠慮のない批評をしている。「(諸名士の箱根別荘拝見記)『星岡』1936.5、pp.17-26)

<sup>24)</sup> 松永安左工門「柳瀬山荘物語 茶老漫歩(十二)」『陶説』1957.9、p.52

がっていたことがうかがい知れる。なお、この「田舎家」は塩原の娘婿である服部正次に受け継がれ、現存する<sup>25)</sup>。

### 原富太郎邸内、横浜本牧および同別邸南風村荘内、伊豆長岡

原三溪は益田鈍翁とともに、松永耳庵を大茶人へと育てた功労者である。横浜本邸内の「田舎家」は高橋箒庵の茶会記録で、1931(昭和6)年に「女婿西郷氏の住宅」<sup>26)</sup>として記されたもので、隣花苑の名で現存する。松永も「西郷さん夫妻の良い住居」<sup>27)</sup>等と表現している。これは「此田舎家は伊豆風の家なれば南風村荘と同じ構へにて」<sup>28)</sup>と記す通り、大仁町(現伊豆の国市)田京廣瀬神社より山田源市の手によって移築されたというものである<sup>29)</sup>。「田舎家の縁側から、雲とたなびく満山の花を眺む」<sup>30)</sup>といった描写からは、独特の開放性を活かして、景観を楽しむ様が伝わってくる。松永は三溪園での花見の直後に、それに学ぶように自身の柳瀬荘で「大家の縁側」<sup>31)</sup>、「本屋の縁」<sup>32)</sup>を寄付に使い、武蔵野の眺望を見せている<sup>33)</sup>。

一方、上記のように伊豆長岡別邸南風村荘内にも「田舎家」があった。ここでは次のような描写が見られる。

打揃うて土間に足を入れ、招じらるゝまゝ大囲炉裡の間に打通れば、此所には焚火が燃えさかつてゐる。みんな安座して炉を囲み其まゝに重组に野菜類の御馳走が二三種あつざりと出た(中略)本席は西縁に添ふた長三畳、もつゝ物入れ位であつたのを巧みに仮用されたのである。<sup>34)</sup>(昭和12年1月)

すなわち、「大囲炉裡の間」で懷石を取り、本席は「物入れ」のような小さな部屋を転用して長三畳の小間として用いたことがわかる。囲炉裏の描写は「田舎家」での特徴であり、鈍翁の「観濤荘」でも見られるほか、松永は自身の柳瀬荘でもたびたび用いている<sup>35)</sup>。また、広い部屋ば

かりの「田舎家」で、小間をつくる工夫が見て取れる。

### 松永安左エ門別邸、平林寺前、埼玉

松永は1938(昭和13)年に柳瀬荘からほど近い名利、平林寺の門前にも「田舎家」を建てた。平林寺の和尚により眠足と名付けられ<sup>36)</sup>、現存している。平林寺との交流は、茶会記録でも散見され、松永夫妻の墓所もここに設けられた。「田舎家」は次のように説明される。

平林寺山荘田舎家は、飛騨高山を距る二里の田舎にありし山家にて、もと七百年云々の事なりしが、足利末葉のものらしい。之は山中定二郎(ママ)氏が買つて京都に移してあつたのを今春魯堂氏が買つたのを、譲受けて、魯堂氏並に京都の大工で平林寺の山荘に建てたる次第である。<sup>37)</sup>(昭和13年4月)

高山付近の民家についての言及は、当時の他の「田舎家」でも見られる。後述する長尾欽彌別邸、扇湖荘(鎌倉)や、神野金之助邸内、又兵衛(名古屋)<sup>38)</sup>等がそれぞれである。いずれも昭和10年頃に建てられており、この時期、高山は富裕層の間に広まった「田舎家」の出所を語るある種のブランドになっていたようである。1934(昭和9)年に高山本線が全通し、移築の手段が確保されたことが要因と考えられる。都市化、近代化から遠い地に古い構法を求め、近代の輸送路を経て移築するという、「田舎家」がその最初期から孕んできた矛盾が飛騨の山奥にまで達したのであった。高山付近からの古民家の移築は、いわば日本の近代化が一定の完成段階に達し、発達段階に拡張してきた領域の限界を予測させる出来事であったといえよう。既にこの時期、最奥の地にまで近代の開発がおよび、秘境がなくなったともいえる。

また、「山中定二郎氏が買つて京都に移してあつた」という言及も興味深い。これは古美術商、山中商会を欧米に展開した山中定次郎を指し、山中商会が古民家をス

<sup>25)</sup> 山崎鯛介「旧三井鉱山箱根山荘「環山」についての見解」『旧三井鉱山箱根山荘「環山」の保存に関する要望書』日本建築学会関東支部、2010.10

<sup>26)</sup> 前掲『昭和茶道記』1巻、p.849

<sup>27)</sup> 前掲『茶道春秋』下巻、p.13

<sup>28)</sup> 前掲『茶道三年』中巻、p.132

<sup>29)</sup> 和辻哲郎「田舎家の辯」『新潮』新潮社、1957.4、pp.109-111

<sup>30)</sup> 前掲『茶道三年』下巻、p.111

<sup>31)</sup> 前掲『茶道三年』下巻、p.114

<sup>32)</sup> 前掲『茶道三年』下巻、p.116

<sup>33)</sup> 中村琢巳氏は柳瀬荘における濡縁が、眺望を目的として松永によって設けられたと指摘している。(中村琢巳「近代茶人・松永耳庵の数寄屋住宅と茶事における献立の関係」『日本之茶道』の茶会記を中心に)『食生活研究』26巻6号、2006、pp.10-17)

<sup>34)</sup> 前掲『茶道三年』中巻、pp.99-100

<sup>35)</sup> 中村琢巳氏はこれを「囲炉裏手前」と呼び、床の間を持たない広間を茶の空間として使う工夫(杉戸に掛軸を、大黒柱に花籠を掛ける)についても興味深い指摘をしている。(前掲「近代茶人・松永耳庵の数寄屋住宅と茶事における献立の関係」)

<sup>36)</sup> 松藤秀雄編『松泉会記録第参編』飯泉甚兵衛、1938、p.234

<sup>37)</sup> 前掲『茶道三年』下巻、p.127。松永はやや詳しく次の記事も残している。「埼玉の野火止平林寺に接する私の所有地に飛騨の田舎家、四間に六間の小さなものではあるが、全部が栗材と槐木で出来て居て四五百年前の作事であるから、屋根廻りの材は斧割りの儘で、柱もチョーナ削りであるのは勿論壁側の外柱は『覗き柱』と云つて上部の湾曲の背に桁を載せて屋根全体を支へて居る。二十四坪の内入口の土間の一部に馬小屋をしつらへ、其続きに六畳の物置、西側に六畳二夕間あるきりで、中央全部五間と四間打ち通しの板間である。其の真中に大きな角炬が切つてある。是れ切りである。如何にも簡素至極なのが気に入り、故山中定次郎氏が買つて京都に置いて居たのを仰木魯堂翁が求め、之を私が譲り受けて同じく仰木君に建て、貰ひ、七月末に出来上つた。屋根は魯堂好みで別荘の所在地たる奥多摩風に、杉皮葺を表に、萱を其下に葺き込み、枕木より大きな堅魚木を交叉し、奥多摩神社の神主の家に使つた破風を用ひたので、昔の絵巻物に出る屋根形を想像せしむる迄に至つた。」(前掲『松泉会記録第参編』pp.232-233)

<sup>38)</sup> 『田舎家又兵衛』私家版、1943。なお、神野の「田舎家」については後年、松永も言及している(前掲「柳瀬山荘物語 茶老漫歩(十二)」p.55)。

トックしていたという話は知られるところであり<sup>39)</sup>、古民家が富裕層の間で流通するある種の道具、骨董品となっていたことを物語る。初期の数寄者にとっては、「田舎家」は自ら探し出すところに妙味があったと考えられるが、それが広まり競争的状况になってからは、専門に仲介を行う者が現れたのである。

さらにここでは仰木魯堂の名が見られる。松永は後年にも、この建物と魯堂の関わりに触れ、次のように述べている。

魯堂君の晩年には、私の平林寺の前の別荘に、飛騨の高山にあったのを持って来て建てて居ります。庭は、無論丸岡が世話したが、総て庭の位置その他は、益田翁が指図したのであります。<sup>40)</sup> (昭和32年)

これによれば、この建物は、建築を仰木魯堂、作庭を丸岡耕圃が担当し、全体の指揮は益田鈍翁が担ったと読める。

#### 仰木魯堂別邸新構、葉山

仰木魯堂は建築技術者として、鈍翁をはじめとする数寄者の信頼を得て、彼らの間に「田舎家」を広めた最重要人物といってよい。1941 (昭和16) 年に没する魯堂にとって、耳庵は数寄者として交流した最後の世代に当たる。

魯堂の葉山別邸については、高橋箒庵が1925 (大正14) 年1月に書いているが<sup>41)</sup>、これは松永のいう海沿いの森戸の「旧宅」のことであり、これに加えて1940 (昭和15) 年頃、山側の少し離れた別敷地に「新構」を造ったことがわかる<sup>42)</sup>。松永はこれを次のように描写している。

森戸神社より海岸を遠回りして数丁を距てた新構に辿りつくと、庭も家も一切新しく入手した工作でありながら、斯道老巧の大家だけに寂十分に匠気を見ない一構、通されたるは二畳向切ともいふべき小間に手取の釣釜いかにもうち侘たり。古石焔、やつれ焔縁、席うちの枯淡なる、鈍翁田舎家の侘びも是にはしかじと迄に思はせた。<sup>43)</sup> (昭和16年2月)

「寂十分に匠気を見ない」ところを評価しているのが注目される。すなわち、建築家の個性のようなものを排し、いかにも昔から存在したかのような銜いのなさ、ある種の匿名性を重視しているのである。建築の目立たなさ、慎み

深さが、肝心だったのではなからうか。個性の強い近代数寄者の間であって魯堂が重用された理由の一端が、ここに現れているように思われる。この建物は現存し、加藤邸として知られるものであるが<sup>44)</sup>、「二畳向切ともいふべき小間」と表現されているのは、入側の奥を仕切った茶室を指していると思われ、田舎家風の大きな建物に小間をつくり出す考案である。松永はこの建物を、直接は「田舎家」とは呼んでいないが、「田舎家」の大家ともいふべき益田鈍翁のそれを引き合いに出し絶賛している。

#### 横山守雄別邸「聴濤庵」および宮又一別邸、千代崎

横山守雄は名古屋の道具商、宮又一も大阪の道具商山中商会の支配人であった。ともに高橋箒庵の茶会記録で、1937 (昭和12) 年に現れている<sup>45)</sup>。

松永は横山の「田舎家」を次のように描写している。

物古びし萱葺屋根が老松に蔽はれ、海の風には数簇の葦竹にて護られたる古雅な庵室にぞ着きにける。げに一昨年鈍翁が来られて之をそっくり小田原に持って帰へりたいと云はれたのも寔に首肯せらるゝ田舎家の逸物ではある。<sup>46)</sup> (昭和15年3月)

1938 (昭和13) 年末に没する益田鈍翁がその最晩年に訪れ、誉めたことがわかる。この逸話は、松永の記憶に印象を残したらしく、翌年にも「出来るなら此庵と此老松とを一緒に小田原の海岸へ持ち運びたい」<sup>47)</sup> という鈍翁の言を記している。

一方、宮の「田舎家」は次のように描写されている。

十数年前より此千代崎に田舎家を造り、業余に蒐められた民藝品は庫に溢れて、数軒から成る田舎家は神棚、ふる棚、竈、台所、押入など其一切に何れも郷土味豊かな器具調度が置合はされ、下手物の粋を祓いたる草の家であるが、吾々は牛を追出して外の用途、即ち寄付に使ふとか応接間に改造するとか考へるのに、宮氏は昔ながらの牛部屋で門が入り、暗がりから牛が首を出して飼桶に突きこまんとしてゐる所で、それが煤びた実大の木彫といふ徹底振りと蒐集力とは驚かされた。<sup>48)</sup> (昭和16年6月)

高橋箒庵も「時代田舎家の所せきまで下手物数々を置

<sup>39)</sup> 鈴木博之『庭師小川治兵衛とその時代』東京大学出版会、2013、p.243

<sup>40)</sup> 前掲「柳瀬山荘物語 茶老漫歩 (十二)」p.52

<sup>41)</sup> 熊倉功夫・原田茂弘校注『大正茶道記』3巻、淡交社、1991、p.13

<sup>42)</sup> 昭和16年9月の「侘茶人魯堂老逝く」で、葉山の「昨年出来たばかりの新宅」と表現している (前掲『茶道春秋』上巻、p.163)。

<sup>43)</sup> 前掲『茶道春秋』下巻、p.107

<sup>44)</sup> 前掲「仰木魯堂 人と作品」pp.46-57、中村昌生『数寄屋建築集成 座敷の構成』小学館、1983、pp.105-111、146-152、『なごみ 仰木魯堂小伝』淡交社、1986.5、pp.10-11

<sup>45)</sup> 前掲『昭和茶道記』2巻、p.514。付記すれば、このとき箒庵は近隣の鼓ヶ浦にあった京都の道具商、土橋嘉兵衛の別邸も訪れ、ここにも「田舎家」があったことが知られる。伊勢湾西岸の千代崎にはこれら道具商の別荘があり、上客の接待に用いられたと思われる。

<sup>46)</sup> 前掲『茶道春秋』下巻、p.61

<sup>47)</sup> 前掲『茶道春秋』下巻、p.131

<sup>48)</sup> 前掲『茶道春秋』下巻、p.132

並べ、牛部屋中に実物大の木彫牛を繫置きたるなど、田舎家相当の古物を蒐集せる丹誠」<sup>49)</sup>と、ほぼ同様の記述をしており、多くの民具や工芸品が並び、なかでも牛の木彫が目を引いていたことがわかる。これは当時流行していた民藝趣味の流れを汲むものと考えられる。前述のように宮が所属していた山中商会は「田舎家」を商品として扱っており、ここに描かれるような工芸品と同列のものとされていたようである。

#### 長尾欽彌別邸「扇湖荘」、鎌倉

長尾欽彌は胃腸薬「わかもと」で財を成した人物で、戦前の数寄者としては最後の新興勢力に属する。鎌倉の他に琵琶湖畔の唐崎にも広大な別荘を所有し、そこにも「田舎家」を建てていた<sup>50)</sup>。鎌倉の別荘は「扇湖山荘」の名で知られ現存するが、松永は「大田舎家の内部を欧風に改め堂々たる別荘とした事を聞き」<sup>51)</sup>訪れた。同行した粟田常太郎は次のように記している。

逢着す大屋体に、主人「これは飛騨高山二里の奥に発見した九間に十一間総二階の山荘で、處の記念として天井は渋紙貼り、柱は巻いて保護しあって、容易に譲らないのを公会堂を寄付して漸く譲り受け、一部の改造と、更に混凝土の地下室を造って古美術の展観に宛てたので」と語る。氷裂風に磚敷ける外廊は勾欄も広く四周を巡り、大扉の上には「東海草棲」と物茂卿が額打たる。廻廊を東に歩むと、廓然として目路には湘南の島山、海光と共に入り、棲に迫る四周の小岳みな此山荘の領地とて一の民家とても見えない。(中略)二階の東部は大田舎家造りで民藝品が面白く配置され<sup>52)</sup>(昭和15年3月)

ここではまず、高山付近から巨大な民家を移築したことが述べられている。前に見たように高山はこの時期の「田舎家」の出所としてブランド化していた。続いて、鉄筋コンクリート造の「地下室」を基壇として、その上に民家を載せていることが語られている。これは建築家、大江新太郎の設計による<sup>53)</sup>。また、基壇上部の仕上げを指す、氷裂風に磚を敷くという表現から、『園冶』等の中国趣味を連想させる点もある。さらに、山荘の名の由来となった、扇状に山に囲まれた海の眺望が賞賛されている。これらの描写から見ても、いわゆる侘び住まいとしての「田舎家」とは異なった、かなり自由な創意を取り入れた近代住宅であっ

<sup>49)</sup> 前掲『昭和茶道記』2巻、p.514

<sup>50)</sup> 矢ヶ崎善太郎「長尾欽彌別邸・隣松園の茶室について 数寄屋師木村清兵衛の研究(2)」『日本建築学会近畿支部研究報告集』46号、2006、pp.777-780。なお、この論文でも山中商会と「田舎家」のことが指摘されている。

<sup>51)</sup> 前掲『茶道春秋』下巻、p.63

<sup>52)</sup> 前掲『茶道春秋』下巻、pp.66-67

<sup>53)</sup> 鈴木博之『長尾欽彌別邸 扇湖山荘』東京大学大学院工学研究科建築学専攻鈴木博之研究室、2002

た<sup>54)</sup>。

#### 醍醐別邸内、京都西加茂

松永は終戦翌年の1946(昭和21)年5月に関西を旅行し、京都西加茂の醍醐別邸を訪れた。この中にあった建物は、江戸初期に公卿、一条恵観によって建てられた茶屋で、現在「旧一条恵観山荘茶屋」として知られるものである。当然ながら、成立も意匠も近代の「田舎家」とは異なるが、醍醐家の管理下にあったこの建物を、松永は「醍醐侯の田舎家」と呼んでおり、その関心の所在が「田舎家」の延長上にあったことがうかがい知れる。松永の訪問は、数寄者仲間であった団伊能(疎林庵)の文章に促されたもので、さらに団の訪問は仰木魯堂の遺言に牽かれたものだった。この建物に関心を抱いた近代数寄者が「田舎家」の愛好者と重なることは興味深く、別に稿を起こしたので参照されたい<sup>55)</sup>。

#### 4. 柳瀬荘と箱根強羅の「田舎家」

戦前から戦中の時期、松永は本邸を東京目白に持ち、埼玉の柳瀬荘、その近くの平林寺門前、さらに熱海、伊豆堂ヶ島、箱根強羅に別邸を所有していた。このうち、柳瀬荘、平林寺門前、箱根強羅には「田舎家」があり、いずれも現存している。ここでは柳瀬荘と箱根強羅の「田舎家」について<sup>56)</sup>、松永の茶会記録以外の資料から検討する。

#### 柳瀬荘内、埼玉柳瀬

柳瀬荘内の「田舎家」は、東京国立博物館の管理下で現存し、黄林閣と呼ばれる建物である。1844(天保15)年の建造と古さはさほどではないが、平面は1棟で桁行13.5間、梁間6.5間と大規模である。間取りは六ツ間取りの背後に小3室が付し9室からなる。この平面に呼応するように鴨居から桁までの建ちが高く、一部2階を擁すとともに、座敷の天井も非常に高く、江戸期の上級農家の完成段階ともいえる民家である。これに入母屋茅葺きの大屋根が載ることで、その姿はきわめて大きく、数寄者の「田舎家」のなかでも傑出した偉容を誇

<sup>54)</sup> この建物に関して、北大路魯山人は塩原又策との会話で、「(その大きさが) あれは一寸類がないのですな。まあ私達の知つてゐる中では、梁の太い点などでは第一でせう。然し、あの家は、もう田舎家ではないですからな…」「といふのは、別に元の田舎家を生かさうと考へてゐるのではないのでしてね。まあ言つてみれば、田舎家の古材を利用して、新しい家をたてたといふ訳ですよ」と述べている(前掲「諸名士の箱根別荘拝見記」。またこれとは別に酷評ともいえる訪問記を記している(「長尾欽彌氏の鎌倉山荘に招かれて感あり(上)(中)(下)」『星岡』1935.6.7.9)。

<sup>55)</sup> 拙稿「旧一条恵観山荘茶屋に対する近代数寄者の関心」『日本建築学会大会学術講演梗概集(建築歴史・意匠)』2015、pp.673-674

<sup>56)</sup> 柳瀬荘、箱根強羅および小田原の、松永が所有した住宅に関しては、「特集 近代数寄者の足跡 松永耳庵をめぐる」『住宅建築』建築思潮研究所、1989.8に各種図面が掲載され、本節ではこれを主たる資料として用いる。

る。松永は玄関ノ間と中ノ間を仕切る杉板戸を他所で求めて建込み<sup>57)</sup>、中ノ間の先にある奥ノ間に床の間を設け、柄穴を正面に見せた古材を床柱とし、竹垂木を利用した簀子天井をつくるなど<sup>58)</sup>、数寄者の「田舎家」として手が増えられている。

黄林閣という名称については、座敷に掲げられた額があり、「黄林閣 松永先生 雅属 孝胥」<sup>59)</sup>とある。松永の茶会記録では、「黄林閣」の名称は見当たらない。

「田舎家」の造営の経緯については「庭園閑談」と題した文章の中で次のように述べられている。

柳瀬の荘に、庭園を営み初めたのは昭和五年八月、  
(中略) 邸宅は田舎風の西洋屋を建つるにありて、  
独逸辺の別荘建ての写真等を集めて帰り、ストーヴ  
など十七世紀風にしたしと思ひ、マントルピース附属  
品や、ロストルの古物など、それに家具調度なども洋  
行の帰りに買求めて来たが、さて実地となると、な  
かゝ純西洋式田舎家の設計をして呉れる者もなく、  
自分で西洋建築に関する書物や写真と睨めくらをし  
ても一向に捗どらず、其内、日本に居れば日本流の田  
舎家なら訳はない話じやと悟って見れば、それに限る  
訳なれば、柳瀬付近の田舎家といふ田舎家を探し廻  
った結果、遂に見付け出したのが今の村山貯水池近  
くの柳窪といふ土地に、村野一族の主家たる巨屋が  
雨晒らしになり、今は無住となって居るといふ事を聞  
き込み、之を買取つて移建するに至つた。<sup>60)</sup> (昭和  
13年)

すなわち、1930 (昭和5) 年から柳瀬荘の造営に取りか  
かり、当初は「田舎風の西洋屋」を考えたものの、方針を  
転換し、「日本流の田舎家」を探索、入手したというわけ  
である。この記述をもとに、他の資料との対照を見ていき  
たい。

まず、「田舎風の西洋屋」に関しては、後年、松永が次  
のように述べている。

柳瀬の庭、建築と云うのは、私が二十七、八年前  
に、第二回目にヨーロッパに渡って、それからアメリカ  
に廻って、アメリカのGEの社長のスウォープの田舎の  
別荘に泊った時に、どうも別荘はかくありたいと思っ  
て、それから家に帰って考えました。スウォープ君の  
屋敷の広い事、ドイツの古い城の材料でありましょ

か、フォレストと云う所から、建築物を持って来て、  
それを建てている。私も一つ、そいつを真似しようと  
思って、ヨーロッパの色々な田舎風のストーブだとか、  
椅子だとか、その他、下手物を買ひ、ドイツあたりの  
古い別荘の写真を、たくさん取り寄せて、研究してい  
たのですが(後略)<sup>61)</sup> (昭和32年)

ここでは、松永は渡米先での経験から、「田舎風の西  
洋屋」に思い至ったことが語られている。ヨーロッパから  
古い建物を移築し、「田舎の別荘」としている様子が描写  
されているが、これらは日本の民家を移築した「田舎家」  
にも共通した点がある。すなわち、古い住宅に価値を見出  
す点、近代の輸送手段によって遠く移動している点、広大  
な敷地で「田舎の別荘」を営んでいる点、そこで遠来の客  
をもてなしている点、等である。松永の甥である熊本徳次  
郎もまた、次のような証言を残している。

イギリスやアメリカで、「東邦電力」の外債を募ったと  
きなどに、大物の実業家と知り合いになると、いなか  
の別荘に招待されることが多くなったらしい。そんな  
折、森を背景とした広々とした屋敷には谷あり、池あ  
り、花園ありで、迎えられるままに、「ティムバー」風  
の建てものに入ると、名画や彫刻の類の数々が飾ら  
れていて、扉といい、椅子テーブルといい、重厚な檜  
材や、くるみ材で造られていて、さぞかしドッシリとし  
た深味のある印象を与えたことであろう。<sup>62)</sup> (平成  
元年)

欧米で当地の富裕層の別邸に招かれた折に、広大な敷  
地の中に建物があり、広葉樹の材で造られた家具等が目  
に入ったというわけである。ここで木造(木骨造)を表して  
いると見られる「ティムバー」や、「田舎風の西洋屋」は、  
19世紀から20世紀初頭にかけて欧米で流行した、ゴシッ  
ク・リヴァイヴァルをはじめとする中世趣味の系譜に属する  
と考えられる<sup>63)</sup>。ビジネスから離れた別邸に招くというこ  
とは、客に対する親しみと信頼の表現であり、松永も体験  
を通してそのような歓待を学び、自らも実践を試みたと思  
われる。

しかし松永は「田舎風の西洋屋」を諦め、民家を探し、  
移築するという、当時数寄者の間で広まっていた「田舎  
家」の手法によって別荘の造営を行うことに方針転換し  
た。そして、見出した民家については次のように述べてい

<sup>57)</sup> 『東久留米市文化財資料集(5) 民家編』1977, pp.107-113

<sup>58)</sup> 桐浴邦夫『近代の茶室と数寄屋』淡交社、2004, pp.55-59

<sup>59)</sup> 孝胥は中国、清末、満州国の政治家で、能書家として知られた鄭孝胥と思われる。昭和11年5月発行の書物では建物の写真に「黄林閣」とキャプションが付されているので(佐藤末蔵編『松泉会記録第壹編』飯泉甚兵衛、1936, pp.382-383)、当時既に命名されていたことがわかる。

<sup>60)</sup> 前掲『松泉会記録第参編』pp.216-217。『茶道三年』下巻、pp.16-17にも再掲。

<sup>61)</sup> 前掲「柳瀬山荘物語 茶老漫歩(十二)」p.55。文中の「スウォープ」は1922-40,42-45年にGE社長であったジェラルド・スウォープのことと思われる。

<sup>62)</sup> 前掲「特集 近代数寄者の足跡 松永耳庵をめぐる」pp.48-49

<sup>63)</sup> こうした傾向はさらに、欧米で郊外住宅や別荘の姿として、建築家によって、あるいは建築家による雛形に基づいて意識的につくられた、いわゆる「カントリー・コテージ」に連なる。

る。

この家は、元東村山の貯水池近くの柳窪と云ふ処にあつて、天保十三年(ママ)に建てたと云ふのだから百年位経つた古色蒼然たる面白い家だったので、最初之を見た時から是非欲しいと思ひ、だん々様子を探つて見ると、村野と云ふ大地主の家で当主は東京で生活して居る所謂不在地主だが、余り大きいので持て余し立ち腐れにして居るとの事であつた。故波多野承五郎氏が懇望して買ふ約束迄出来て居たのに、その内波多野氏が死んだので御終ひになつたと云ふ話も判つた。<sup>64)</sup>(昭和13年)

近代の産業構造の変化から、前近代の地主層が都市部に移り住み、建物だけが残されていた様子がよくわかる。「田舎家」の供給源がこうした大規模な空家であったことは、森川勘一郎別邸や益田孝別邸内「観濤荘」などの例で前稿でも見たとおりである。文中に見られる波多野承五郎は古溪と号し、高橋箒庵らの茶会記録にもたびたびその名が見られる数寄者だが、波多野も「田舎家」を準備していたことがここからわかる。波多野は1929(昭和4)年9月に没しているのので、この逸話はその後のことと考えられる。

他方、土地の入手に関しては、次のように述べている。

柳瀬から五里ばかり離れた、古い田舎家を買入れたのです。まあ、もらった見たいのものです、それを建てる場所を、色々考えていたのですが、結城安次君が、その頃、東京電力の送電線の用地を調べておりましたのですが、その結城君に頼んで、送電線の通る近所に松林があって、それを手に入れる事が出来ますからと云うので、見に行きました所、中々いい場所で、藪だらけの松山でありますけれど、雑木もある。そこに田舎家を持って来て建てよう云う事から始まったのであります。<sup>65)</sup>昭和32年)

後年の回想ではあるが、これによれば、「田舎家」の入手が先で、その後土地を探したように解釈できる。先の「庭園閑談」に「庭園を営み初めたのは昭和五年八月」とあるのは、この順序と矛盾しない。

柳瀬荘内「田舎家」竣工の時期は、松永の文章に当たる限り明確には書かれていないが、尾崎直人氏はその竣工を1932(昭和7)年の夏から秋としている<sup>66)</sup>。これは雑誌『星岡』の記事や『松永耳庵買物控』の記録から実証的に推測された時期で、この後見るように、翌昭和8年3月

<sup>64)</sup> 前掲『松泉会記録第参編』pp.207-209

<sup>65)</sup> 前掲「柳瀬山荘物語 茶老漫歩(十二)」p.55。確かに現在も柳瀬荘の南西を送電線が走っている。

<sup>66)</sup> 前掲「松永安左エ門茶の湯事始め 安左エ門から耳庵へ」pp.8-12、「耳庵・松永安左エ門 その人と茶の湯コレクション」pp.176-183

の柳瀬荘への訪問記が『星岡』に掲載されていることから、遅くともこれまでにはできあがっていたことは間違いない。移築については、松永は次のように書いている。

大工もいゝ按配に腕きゝが居て万事都合よく進み、予定より遙かに安かつた。(中略)木組は、約百年も経て居ながら、なかゝゝ耽かりとして居て、その儘で建てられた。其上に壁の中に鉄を入れたりして補強工事をして居るので、当分は大丈夫だ。<sup>67)</sup>(昭和13年)

関東大震災の記憶も覚めやらぬ昭和初期の「田舎家」で、補強工事が行われたことは、井上準之助別邸などの例で見られる<sup>68)</sup>。大工については、松永の邸宅の建築には古谷善造、孝太郎父子が関わっていたことが知られている。松永は後年の回想で次のように述べている。

大工は益田鈍翁が箱根方面の茶庭を作り茶室を作った時に、鈍翁の指導を受けて居りました、古屋善三郎(ママ)と云う老人に頼みました。この人が丸岡君と共に、十六年間柳瀬の建築をやったのであります。<sup>69)</sup>(昭和32年)

これによれば、古谷は益田鈍翁の別荘の工事に携わったことが推測できる。松永の甥の熊本徳次郎によれば<sup>70)</sup>、古谷父子は松永の強羅別邸、熱海別邸小雨荘、柳瀬荘内の各建物を手がけたというが、その強羅別邸について、松永の次のような記述がある。

大正七八年であつたか益田翁の使つて居らるゝ一色と云ふ大工に、私の強羅の別荘を作らせた。私は此一色の天才に直ぐ惚れ込んだ。何もかも任せた。私の建築趣味、庭園趣味は一色が種子を卸ろして呉れたのである。其一色は又益田翁の気に入りで箱根の翁の別荘を作り、仙石でも仙石の深谿で翁の爲めに草舎を作つた。<sup>71)</sup>(昭和13年)

<sup>67)</sup> 前掲『松泉会記録第参編』pp.208-209

<sup>68)</sup> 拙稿「御殿場における田舎家について」『日本建築学会大会 学術講演梗概集(建築歴史・意匠)』2014、pp.489-490

<sup>69)</sup> 前掲「柳瀬山荘物語 茶老漫歩(十二)」p.51。なお、松永に招かれた大宮呉山楼は「古屋善三」と書いている(「柳瀬山荘」『陶説』1955.6、p.43)。

<sup>70)</sup> 前掲「特集 近代数寄者の足跡 松永耳庵をめぐって」pp.48-49。なお、松永と古谷の共同作業は柳瀬荘以降も続き、小田原の老櫓荘が形成されていくことになる。

<sup>71)</sup> 前掲『松泉会記録第参編』p.128。なお、松永の強羅別邸は「諸戸山荘」となったが、近年取り壊された(前掲「旧三井鉦山箱根山荘“環山”についての見解」)。一方、中村昌生は「もと松永耳庵の別邸であつた」として強羅の「諸戸家別邸」について記しているが、ここでは「大正11年諸戸家が譲り受けられたのであるが、主屋は耳庵が魯堂に造らせたものと伝えられている」とある(「仰木魯堂 人と作品」『和風建築』建築資料研究社、1984.2、pp.3,32-45)。この異同については不明である。

一色とは一色七五郎を指し、これについては次項で触れるが、先の引用部における益田鈍翁との関わりを考え合わせると、ここに書かれている一色が手がけたという強羅別邸の大工の中に、古谷善造がいたと見られる。古谷孝太郎は1930（昭和5）年、18歳のとき柳瀬荘内で松永と対面し、そのときは東の飛び地に「松風詞」というお堂を建築中だったといい、その後「庄屋さんの堂々たる茅ぶきの家をひいてきて中央に据え」<sup>72)</sup> たという。松永が本格的に茶を始めてからは、柳瀬荘内に次々と茶室を手がけていったようだ。茶会記録でも、1937（昭和12）年4月に茶室、春草廬を棟上した際の記事に、「大工古屋（ママ）に命じ」<sup>73)</sup> 建てた、との記載が見られる。

作庭は丸岡耕圃が長年にわたって手がけ、松永の回想では「秩父の川を移築する」という項で、柳瀬荘内に滝をつくりたいという希望に対し、次のような丸岡の言が紹介される。

趣きは武蔵の国なのだから、武蔵野にある川に行って、すなわち、秩父近くの平原に出る小川に行って、その小川の石なり、なんなりをそっくり持って来て、それをそのまま作らなければならない。それでは一つ、これからそう云う田舎の溪流に行って、庭に使える所を見て歩こうじゃありませんか、と申しました。<sup>74)</sup>（昭和32年）

そして、ある寺の所有地内にある滝を発見し、そこにある石を全部買収するという場面が描かれる。こうして運ばれた石組みに井戸水をポンプで汲み上げ、溪流をつくりあげたという。こうした逸話からは、まさに「川を移築する」ような非常にスケールの大きな構想で作庭が行われた様子がわかる。丸岡は数寄者としても一家言を有し、松永の茶会記録ではたびたび茶会に相伴したり、出張の伴をしたりしており、松永は全幅の信頼を寄せていたことがうかがい知れる。

ところで、松永が「田舎風の西洋屋」から「日本流の田舎家」へと方針転換した背景を考えてみたい。松永は「純西洋式田舎家」の適当な設計者が見つからなかったと述べているが、一方で自ら設計を試みた様子もあり、松永の独立独歩の性格からしても、やはり別荘は自らの好みでつくりたいという意図があったと思われる。そこで松永同様、独立心の強い当時の数寄者がやっていたように、専門の設計者によるのではなく、「田舎家」としたのではなからうか。そこでは何よりも施主の審美眼が第一であり、既存民家の転用であるだけに、大工の技巧すら二次的な

こととなる。

柳瀬荘に「田舎家」を建てた時期、松永は北大路魯山人らと親しく交流していた。魯山人の「田舎家」趣味は、北鎌倉の工房から笠間に移築された旧居が、現存する建築物として物語っているが、魯山人の主宰した星岡茶寮の機関誌『星岡』には、たびたび「田舎家」に関する記事が見られ、魯山人の茶寮や工房などのほか、数寄者の邸宅内のものも取り上げられ、これらの多くが後に松永の茶会記録に現れる場所と重なる。これらのことから、松永の「田舎家」建設に魯山人の影響を認めたくなる。しかし前述の尾崎氏は、松永の「田舎家」の方が魯山人のそれよりもやや早く竣工していると推測されること、「御互が知合った時はもう二人とも龐大な古い田舎家を移築しかけて居った」<sup>75)</sup> という秦秀雄の記事などを詳しく考察し、松永の「田舎家」建設について、魯山人からの直接的な影響とは考え難いとしている。一方的な影響ではなく、偶々同時期に同好の士に出会ったと解されよう。むしろ「田舎家」が縁となって、両者の交流が深まったといえるのかもしれない。数年後には袂を分かつことになる松永と魯山人であるが、「田舎家」竣工後の1933（昭和8）年には柳瀬荘への訪問記も『星岡』に相次いで掲載されている。初出となる3月の訪問記には次のような記載がある。

屋根二階にしつらへた茶室は、おそらく此建物を通しての圧巻であらう。こゝには又さまざまの民俗器物や工芸品などが夥しく置かれてあつた。<sup>76)</sup>（昭和8年3月）

土間に面する広間、茶ノ間の階上に部屋があり、これをここでは茶室と呼んでいると思われる。松永が本格的に茶の湯を始める前のこの時期、そこはいわゆる下手物といわれるような工芸品が並ぶ、まさに日本版カントリー趣味の空間であったことが推測される。

さらに、これも尾崎氏が指摘していることだが、松永が「田舎家」を所有したのは、本格的に茶を始める前であったことは注目に値する。通常、益田鈍翁の追随者としてのこの時期の近代数寄者にあつては、「田舎家」は茶のひとつの道具立てであり、茶に追従する空間である。しかし、松永にあつては「田舎家」の方が先行し、後から茶がそこで行われるようになったのである。尾崎氏の言を借りれば、「松永は草の茶を受け入れる下地を、意図せずに準備して」<sup>77)</sup> いたことになる。巨大な「田舎家」を探し、移築す

<sup>72)</sup> 前掲「特集 近代数寄者の足跡 松永耳庵をめぐる」p.49。古谷孝太郎は松永との出会いを昭和57年の対談で証言している（中村昌生『日本の匠 六十三人の棟梁と語る』学芸出版社、1995、p.320）。

<sup>73)</sup> 前掲『茶道三年』中巻、p.146

<sup>74)</sup> 前掲「柳瀬山荘物語 茶老漫歩（十二）」p.54

<sup>75)</sup> 秦生「窯場便り、其他」『星岡』1934.2、pp.22

<sup>76)</sup> 井坂生「柳瀬山荘を訪ふ」『星岡』1933.5、pp.15-16。これに続けて、秦秀雄「柳瀬行」『星岡』1933.7、pp.9-11が掲載され、このときは魯山人らが訪れ、小林一三も同行している。小林は松永と同世代の旧友であり、ともに実業家で、魯山人らとの交流後、数寄者の仲間入りをした点でも共通している。小林の自邸「雅俗山荘」が、竹中工務店の設計、施工による、松永のいう「田舎風の西洋屋」であることも興味深い。

<sup>77)</sup> 前掲「松永安左工門茶の湯事始め 安左工門から耳庵へ」p.14

る構想力、実行力、財力、そして何よりそうした空間に対する美的感覚。そうした松永の能力、感覚こそ、鈍翁が松永を次世代の後継者として見込んだ一因であったと考えられる。松永においては柳瀬荘内の「田舎家」が縁となって北大路魯山人と親しくなり、やがてそれと入れ替わるように益田鈍翁との交流が深まったのであった。

### 「白雲洞」「不染庵」、箱根強羅

箱根強羅の「白雲洞」は、益田鈍翁によって創建され、原三溪に譲られ、さらに松永耳庵が三溪亡き後の原家から譲られたという由緒をもち、強羅公園内に現存する。現在、公園内の門から入ると、腰掛待合があり、巨岩の上層に桁行3.5間、梁間2間、茅葺きの「白雲洞」が見える。

「白雲洞」を中心に、その手前に「白鹿湯」、西奥に桁行2.5間、梁間3間、茅葺き、柿葺きの「不染庵」、東に桁行4.25間、梁間3.25間、柿葺きの「対字齋」と呼ばれる各棟からなり、「白雲洞」は全体の名称としても用いられることがある。これらのうち、「白鹿湯」は温泉を利用した石風呂であり、「白雲洞」と「不染庵」は後述するように仰木魯堂が手がけたとされる茶席である。「対字齋」は原三溪が増築したものと伝えられる。

中心となる「白雲洞」は、その姿から「田舎家」の代表的な遺構とされ<sup>78)</sup>、「田舎家」趣味を広めた益田鈍翁の好みを伝えるほとんど唯一の遺構といつてよい。しかしながら、「白雲洞」は、鈍翁、三溪時代の様子を伝える高橋箒庵や野崎幻庵には「田舎家」と描写されたことはない<sup>79)</sup>。箒庵がはじめてこの茶席について記録した1916(大正5)年の茶会記には次のように書かれている。

石山の右手最下層に湯殿あり。(中略)之に接続して一段高く七畳床付の座敷あるは即ち今日の寄付にして、夫れより猶ほ一段高き崖上に更に一小庵室あるは、是れなん新席強羅山荘にぞありける。<sup>80)</sup>(大正5年8月)

ここに述べられる湯殿が「白鹿湯」、寄付が「白雲洞」、小庵室が「不染庵」とすると現状の配置と合致する。また「白雲洞」の壁床や仏龕が、松永時代に一畳の

床を改造したものだとする<sup>81)</sup>、箒庵の言う寄付の「七畳床付」と合致する。また、このときの箒庵の茶会記には、茶杓の筒書きに「遠山」とあるところから、「遠上寒山石徑斜 白雲生處有人家」<sup>82)</sup>の唐詩が連想されるとあり、これが後の名称の発端となった可能性がある。

他方、松永が入手後に記した「白雲洞の主人となるの記」では、次のように書かれている。

一色は園内の一角に煎茶席を建てたのに対し、鈍翁は仰木魯堂をして田舎家風の茶席を作らし、浴槽の如きも奇古たる洞窟を造り、恰も釣鐘温泉を模したるかに見ゆるのは、硫黄質で黄濁してゐる強羅の湯には寔に似合ひである。此煎末の草庵と洞窟浴場とが白雲洞そのものであつた。それから三溪先生の代になつて、明星岳の大文字の山焼を望む地点に一樓を新たに増築せられ現在に到つたのである。此新席には鈍翁は対字齋と額を打たれた。三溪先生は茶室不染庵の額と白雪洞(ママ)の額とをものされ、浴場の扉に「白鹿湯」として、  
鈍翁益田大人之所造、構想奇古 余甚喜焉。鈍翁以之授三溪 干時大正十年正月也 三溪識<sup>83)</sup>(昭和15年7月)

ここで一色とは一色七五郎を指し、強羅公園の造園を手がけたことが知られている<sup>84)</sup>。一方、仰木魯堂による「田舎家風の茶席」といわれるのが「白雲洞」と「不染庵」を指すと見られ、これについては次に詳しく見る。また、ここに引用されている三溪の由緒書きは、現在「対字齋」に掲げられており、そこには「大正十一年」と読める。さらに、「白雲洞の主人となるの記」はほぼ同様の内容を記した直筆の額が「白雲洞」内に掲げられており、それと照合すると「白雪洞」とあるのは誤植と判断される。その上で、松永の記述によるならば、「対字齋」は鈍翁によって命名され、「不染庵」と「白雲洞」も三溪の時代からの呼称と読める<sup>85)</sup>。

<sup>78)</sup> 例えば復原工事を手がけた中村昌生が完成後に記した「箱根強羅公園の白雲洞茶苑(1)」『和風建築』和風建築社、1982.10、pp.156-177、「同(2)」1982.12、pp.166-183、「同(3)」1983.2、pp.162-179のうち、(1)には「田舎家の白雲洞」、(2)には「白雲洞」について「宮城野あたりにあつた民家を移して建てたものという」という写真キャプション、(3)には「田舎家の茶をこよなく愛好した鈍翁」といった表現が見られる。ほぼ同様の記述は、中村昌生、日向進、吉井宏「近代の茶室」『茶道聚錦7 座敷と露地(一) 茶座敷の歴史』小学館、1984、pp.288-290にも再掲されている。

<sup>79)</sup> 当時の記述については、拙稿「益田鈍翁小田原別邸・掃雲台の土地、建物、景観の復元的考察 その3」『常葉学園大学研究紀要・教育学部』第33号、2013、pp.311-335参照。

<sup>80)</sup> 高橋箒庵著、熊倉功夫・原田茂弘校注『京都茶会記』第3巻、淡交社、1989、p.292

<sup>81)</sup> 『白雲洞茶苑』のホームページには「床柱は、松永耳庵時代のもので、千年を経た奈良当麻寺で使われていた古材です」との記載がある(2015.9現在)。また、前掲「特集近代数寄者の足跡 松永耳庵をめぐる」p.11には大竹誠による「元床の間であつたところを土壁で塞ぎ、その内部にとられた仏間(板張りの一畳)」との記述がある。

<sup>82)</sup> 前掲『京都茶会記』第3巻、p.296。この記述は松永も「益田鈍翁の茶歴」(前掲『茶道春秋』上巻、p.192)で引いている。

<sup>83)</sup> 前掲『茶道春秋』上巻、pp.157-158

<sup>84)</sup> 一色七五郎の事蹟に関する強羅公園内の石碑については、前掲「箱根強羅公園の白雲洞茶苑(2)」に詳しい。

<sup>85)</sup> 現在、掲げられている扁額では、「対字齋」には「観濤」(鈍翁の別号)、「不染庵」には「鈍翁」と落款が認められる。「白雲洞」にはない。野崎幻庵は1922(大正11)年に鈍翁共々、三溪の茶会に招かれた様子を伝えており、そこでは「荘を改めて無心山荘と呼び、庵を名づけて不染庵といふ。荘称庵号共に鈍翁三溪余等三人の合議にかゝるは言ふまでもなし」(野崎広太『茶会漫録』第10集、中外商業新報社、1925、p.115)と書かれている。これによっても「不染庵」は鈍翁が三溪に譲ったときに命名されたように読め

他方、藤原銀次郎は、「白雲洞」が松永の所有に帰し、整備された直後に、席名や成立の事情を詳細に記事にしている。藤原は野崎や高橋に続く世代であり、松永にとっては先輩格に当たる。長くなるが次に引用する。

耳庵老が、この程箱根強羅にある不染庵の席開きをされた。この不染庵といふのは、今を去る約三十余年前、故草郷氏が箱根に電車を敷設し、強羅を終点として大に其処を開発せんとするに当り、益田鈍翁の助力を求めた。なんでも新しい事には興味を持たれた鈍翁は、これにも亦大乘気で早速公園に面した景勝の地を選び、自分は此処に茶席を造らうとし、他の知友にも別荘地として買取りを勧められた。その頃、例の仰木敬一郎君は、築庭並に建築にかけては天下双ぶ者なき天才なりとの噂が高く、それには誰も異議はなかつたが、なに分同君は文人風の畑から茶道に入った人のこと故、所謂茶人の気に入らぬ所もあつて、その点は如何にも其通りだ、ヨシ俺が一番仰木君を教育して、茶庭茶席の立派な専門家に仕立上げて御覧に入れよう」と、大に意気込んで同君を呼寄せ、その由を懇々と伝えて、さうして「なんにも言はず、なんにも干渉せず、一切を挙げて君にお任せするから、この分譲地に本当の茶席と茶庭を造つて見よ、君の気に入るやうに存分にやつて見よ」と命令された。同君にしてみれば、これは願つたり叶つたり有り難い仕合せで、天にも昇る心持はするが、なにがさて相手は斯界の大御所、三面六臂の大家だ。その上翁の周囲には有象無象の大小天狗が控へてゐる。萬一これに失敗でもすれば、入学試験に落第するも同然の結果となるから、その心痛一方ならず、昼夜を別たず苦心惨憺、有りたけの智能を絞りつくして、漸く造り上げたのが此別荘である。鈍翁一瞥、これを激賞し、直ちに本席を不染庵、寄付を白雲洞と命名し、茶席開きの茶事その他よろしくあつて、仰木君の手腕力量を宣伝せられたから、同君も大に面目を施した。仰木君にとっては、これが茶席として処女作といふべきものであり、また登龍の門ともなつたのであるといふ。<sup>86)</sup> (昭和15年8月)

ここでは仰木魯堂が手がけるようになった経緯が面白おかしく綴られているが、この建物への魯堂の関与については高橋箒庵や野崎幻庵の記述には見られない。一方、藤原が魯堂を「文人風の畑から茶道に入った」と評するの

る。また、三溪没後の1942(昭和17)年に三溪園で道具商の中村好古堂主人によって催された茶会で、園内聴秋閣の床に三溪の画賛が掛かったことを松永は記し、その引用部には「昭和八年晩秋 於白雲洞 三溪併題」(前掲『わが茶日々』p.175)とあり、この「白雲洞」が強羅のそれを指すとすれば、三溪所有時代の1933(昭和8)年には「白雲洞」と呼ばれていたことが推測できる。

<sup>86)</sup> 前掲『茶道春秋』下巻、pp.205-206

は大正初期の箒庵の記事によるものであり、箒庵はこの頃徐々に魯堂の力量を認めていった<sup>87)</sup>。鈍翁と魯堂の間に、藤原が伝えるような事情があったかどうかは確かめようがないが、「有象無象の大小天狗」のひとりである箒庵の評価などから推すと、鈍翁、箒庵らが魯堂を好みの建築家に育てたことは間違いなであろう。

藤原は鈍翁が「本席を不染庵、寄付を白雲洞と命名」したとしているが、これも箒庵や幻庵の記述では別の席名が書かれており、当時これらの「命名」があったかどうかは前述のように判然としない<sup>88)</sup>。藤原がこの文章を書いたのは、松永の所有となった1940(昭和15)年であったことに注意する必要がある。その上で藤原と先の箒庵の記述とを考え合わせると、「白雲洞」を寄付と見なし、その奥の「不染庵」が本席であり、これらは仰木魯堂の手により大正5年頃、同時に建造されたことになる。藤原はこの引用部に続く茶会の様子を伝えた部分で、「本席不染庵」<sup>89)</sup>の「席を転じて持仏堂に入れば、床はなく、床裏に三溪翁遺愛の天平の聖観音像を安置し」<sup>90)</sup>と記しており、ここで「持仏堂」と呼ばれているのは「白雲洞」の現状と合致している。松永自身にも「持仏堂には石山切の瀧の歌を掛け、二三の花筒に野草を挿す。終て不染庵一畳台目向板丸炉に手取釜でお茶」<sup>91)</sup>といった記述があり、「持仏堂」すなわち「白雲洞」を寄付とし、「不染庵」を本席として使っている様子が伝わっている。

以上のように、「白雲洞」については、建築物群の変遷に不明な点があり、現状のどの部分がいつ頃、どのように形成されたのかわからない点が残る。松永も「自分はいつの間にか両先輩の型を破り、趣向を紊し、北側の水屋を毀ちて茶室とし、待合の建物を改造し、雪隠を移転した」<sup>92)</sup>と記すように、かなり手を加えたことがうかがい知れる。

しかしながら、何よりも「白雲洞」が現存することの価

<sup>87)</sup> 拙稿「高橋箒庵の茶会記録に見られる仰木魯堂の初期作品に対する評価」『日本建築学会大会学術講演梗概集(建築歴史・意匠)』2013、pp.867-868

<sup>88)</sup> 松永は「益田鈍翁の茶歴」(前掲『茶道春秋』上巻、p.190)で、「箱根強羅の山庵で田舎家の茶を出して居られる」と伝え(参照源は箒庵の記事と思われる)、その注釈として「其後原三溪翁より現在耳庵保有の白雲洞、仰木魯堂が初めて上京した頃の建築作品である」と記している。すなわち「白雲洞」は「現在耳庵保有」の名称であるとも読める。

<sup>89)</sup> 前掲『茶道春秋』下巻、p.206

<sup>90)</sup> 前掲『茶道春秋』下巻、p.207

<sup>91)</sup> 前掲『茶道春秋』下巻、p.165。ただし現状の不染庵は二畳台目向板であり、この異同については不明である。

<sup>92)</sup> 前掲『茶道春秋』上巻、p.157。注79)の拙稿にも記したが、仰木魯堂の弟子、藤井喜三郎は、「昭和十五年七月、仰木先生は松永安左衛門氏の依頼を受けて、松永氏の箱根強羅の別荘、白雲洞に付随させて、田舎家風茶席を建築しております」(藤井喜三郎『艸居庵記』私家版、1980、p.102)と書いており、この記述の意味は不明だが、松永が相当に手を加えることは読み取れる。また、矢ヶ崎善太郎「小田原・箱根の別荘群と茶室」『なごみ』淡交社、2014.11、pp.36-41も、この点に含みを残していると読み取れる。なお、現在は「北側の水屋」は中村昌生によって推定復元されている。

値は大きく、近代数寄者の「田舎家」を実例として見ることのできる意義は大きい。鈍翁、三溪、耳庵という三代の近代数寄者の手を経た建築物群は、まさに茶道具が少しずつ付属品や添状を加えながら受け継がれていくように、またときには大胆に切り継いだり補修を加えたりするように、そのときどきの持ち主に応じて変化のなかにあり続けたこと<sup>93)</sup>、むしろ独特の意義を見出すべきではなからうか。

## 5. まとめ：松永耳庵における「田舎家」の特徴

松永耳庵が茶会を記した時期は、益田鈍翁らの「田舎家」が、高橋箒庵らの記述を通して広められた後にあたり、「田舎家」が既知の茶室あるいは住宅のタイプとして扱われているせいか、箒庵の記述に比べると説明的な描写は少ない。その代わりに、自身も「田舎家」の所有者であることから、それを通じた美意識の共有が、鈍翁をはじめとして原三溪、仰木魯堂、塩原又策らとの茶会から読み取れる。

松永における「田舎家」は、茶の湯に親しむ前に柳瀬荘に建設されたものからはじまった。それは北大路魯山人らとの交流期にあたり、民藝運動の台頭等ともほぼ同時代と見られる。松永の柳瀬荘における初期の描写や、宮又一別邸、長尾欽弥別邸の描写から、そうした流行を感じ取ることができる。

また、「田舎家」の発案の前提には、「田舎」の景観、環境に対する欧米の趣味を、渡米先での体験から学んでいたことも重要である。すなわち、きわめて近代的なビジネスの経験から、日本の民家に辿りつくというプロセスが見られる。

その後、松永は「田舎家」を通して、近代茶の湯の巨人である鈍翁と三溪の美意識に強く共感し、自身の趣味や交際も変化していったと考えられる。言い換えれば、松永にとって「田舎家」は、より深い世界に導いてくれた空間であり媒体であった。そして柳瀬荘内には、耳庵、春草廬、斜月亭、久木庵と、順次茶室が整備されていく。これは、例えば鈍翁の小田原別邸掃雲台が、中央に書院を据え、庭内各所に茶室を点在させ、「田舎家」も移築されてきたのと比較すると対照的である。柳瀬荘内では茶室を加えていくにしたがって、土塀を備えるなど<sup>94)</sup>、もともと中

央に存在する巨大な「田舎家」と、茶の湯の空間をどのように共存させ、「田舎」の茶を成立させていくかに心を砕いているように見える。

「田舎家」の使用法としては、民家独特の設備である大炉、囲炉裏の描写が目立つ。自分の柳瀬荘はもとより、鈍翁の掃雲台や三溪の南風村荘の「田舎家」で、通常の茶室の炉とは異なり、主客がそこを取り囲み、共に火を見、食事を摂る体験に、真のもてなしを感じていたと考えられる。

「田舎家」で小間をつくる工夫についても描写されている。三溪の南風村荘では長三畳があり、魯堂の葉山新居でも、入側の奥を利用して茶室としている。松永自身の手で落ちた後に「白雲洞」につくられた床裏の持仏堂も、開放性の高い「田舎家」のなかにニッチのような空間をつくり出す試みであり、松永がこうした空間に関心を寄せていたことがわかる。

最も注目されるのは、「田舎家」の建つ景観についての描写である。鈍翁の掃雲台における折々の畑や、三溪園の花見の描写からは、「田舎家」の環境こそがもてなしと感じている様子がわかる。柳瀬荘では、藤原銀次郎らの筆を借りて景観が賞されるほか、自身では三溪を招いたときに、「主翁は初めての来荘とて殊の外、武蔵野の景色を愛賞せられ懇意な相客と打興ぜられ八時頃帰浜の途に就かれたのは主人として此上なき満足であった（昭和10年11月）」<sup>95)</sup>と書いている。松永耳庵は、鈍翁、三溪から「田舎家」とその景観を誉められ、彼らの茶風を引き継ぐ自覚に至ったのではなからうか。それは近代の東京、関東、武蔵野の茶風ともいうべきものであろう。『茶道三年』「おくかき」にある次の言葉を結びとしたい。ここには自分たちが発見し、実践した近代の美意識への矜持がある。

我が武蔵野には宗旦や庸軒や京都人の知らなかつた  
野花が天上の星の如くにある。<sup>96)</sup>

(引用部において、一部旧漢字を常用漢字に改めた)

**謝辞** 本稿執筆にあたり、東京国立博物館柳瀬荘の針生氏の、資料作成に関して和田厚氏のご協力を得た。謝意を表します。

<sup>93)</sup> 昭和22年8月には、服部松楓(正次)が義父塩原禾日庵(又策)を正客として「白雲洞」で茶会を催し、松永も同席している。このときの様子を松永は「私には縁由深甚なる此白雲洞」と書き、服部の弁として「所も鈍翁三溪翁遺構であり耳庵翁にもゆかり深き此白雲洞」と伝えている。また「白雲洞の数席は隣の翠光館主の骨折で屋根の洩り、壁、畳、白鹿岩窟浴場など大破中破せるを新たに修繕され、少しく庭樹切り過ぎの嫌ひはあるが、来客には明るくなつて喜ばれるであらう」ともあり、これらからは、この時期「白雲洞」は松永の手を離れ、翠光館の管理下にあったように読み取れる(『日本之茶道』1947.9、p.16)。

<sup>94)</sup> 前掲「柳瀬山荘物語 茶老漫歩(十二)」p.56

<sup>95)</sup> 前掲『茶道三年』上巻、p.24

<sup>96)</sup> 前掲『茶道三年』下巻、おくかき「床の花」p.6

年月日は例えばS100605は昭和10年6月5日を示す

茶席名は茶会記録に記載のとおり、( )は推測、補遺を示す

三年：茶道三年（上中下）、春秋：茶道春秋（下）、日夕：わが茶日夕を示す

「田舎家」の記述がない場合でも、別の箇所の記述で田舎家であることがわかっているものは記載した

（田舎家）は「田舎家」とのみ呼ばれ、固有名が記されていない場合を示す

巻	年月日 (記述 日)	所在	邸名	「田舎家」と 表現された建 物	描写（文末の( )は引用部の冒頭ページを示す。別の箇所で「田舎家」と記述されているものは文末に（既出田舎家）としてカウントに含む。冒頭に*のあるものはカウントに含まない（備考を文末に記す：「田舎家」の表現がない類似例、当時現存しない等）。また、松永以外による文章は筆者を記した。）
---	------------------	----	----	-----------------------	--

表1 『茶道三年』に現れる「田舎家」

三年下	S100605	柳瀬	松永安左エ門別邸、柳瀬荘	本屋	常緑新翠の樹立の中に時代ある萱葺の大家屋はゆゝしく建つ(附録2-12) (既出田舎家) (栗田常太郎)
三年上	S101123	箱根木賀	塩原又策別邸	(田舎家)	本年初秋に工を終へられしと聞く、賤ヶ岳麓より移建されたる田舎家(29)/家の構造は、長炉を中心として鍵の手なりに之を囲んで居室をしつらへ、茶席に用ひるものは其東北隅の早川溪流に対するものであつた。(29)/母屋の太い丸形の大黒柱、黒く渡せる棟木の交錯の裡に、能く手入れしつゝある煤光る舞良戸と対照して寔に雅絶なる環境を作り出して居る。(29)
三年上	S101212	名古屋田代町	森川勘一郎別邸	(田舎家)	覚王山近くの田舎家、場所広からざるも古雅閑寂の気漂ふ。(46)
三年上	S110208	小田原	益田孝別邸、掃雲台	(田舎家)	其田舎家の庭には炉火赤く燃えて暖か也。(73)
三年上	S110618	柳瀬	松永安左エ門別邸、柳瀬荘	本屋	初めは本屋へも上る気は無かりし様に見受けられしが、庄屋風田舎家が気に入り長座せられ(105)/田舎家の大なるには、なかゝお気に入り、之は今日最も頭を打たれたる一なりと仰せあり、此次ぎには此大炉の辺にてこそ、飯と茶とを饗してほしいと言はる。...明治初年の百姓一揆が此家の柱に疵をつけしと説明せしに、軽井沢の自分の百姓家も会津戦争の弾丸が痕ありとの話も出た。(106)/日本中田舎屋のいづれにも見ざる古式の御住居を拝観し轉た感に堪へざるはよきが自身のものが急に嫌らひになりて羨しき念が深くなり候には困却致候(106) (益田孝)
三年上	S110818	軽井沢	根津嘉一郎別邸、麗沢山荘	牛部屋	*寄附は牛部屋造り、奈良古材を用ひて結構也、用材が少し華奢に過ぐるため牛部屋の感じ少し。(121) (類似例)
三年上	S110820	箱根仙石原	団別邸	(田舎家)	此山側の田舎家が当日の席にて、洋間に待合ひ、四畳半の茶室にて懐石あり(128)
三年上	S110927	柳瀬	松永安左エ門別邸、柳瀬荘	本屋広間	本屋広間(146) (既出田舎家)
三年中	S111106	小田原	益田孝別邸、掃雲台	観瀾居	(松永が柳瀬での) 田舎家の茶をご案内(41) (他所での描写) / 席は土間寄附より直ぐの間に(42) (既出田舎家)
三年上	S111010	京都大宮玄塚	土橋嘉兵衛別邸、玄塚山荘	(田舎家)	寄附 田舎家(179)
三年上	S11秋	柳瀬	松永安左エ門別邸、柳瀬荘	母屋	母屋大炉の間に招じて(192) (既出田舎家)
三年中	S111110	千駄ヶ谷原宿	団邸		*今春、柳瀬の山荘に御出での時は田舎家の大炉で(51) (他所での描写)
三年中	S111121	柳瀬	松永安左エ門別邸、柳瀬荘	田舎本宅	田舎本宅の大炉の側にて(55)
三年下	S111209	柳瀬	松永安左エ門別邸、柳瀬荘	母屋	母屋の待合(22)/大囲炉裡の間に通ると、天井なる「はちけん」の明りの下、自在に手取釜が杉雨の音ゆゝしく沸ゆる。(22) (既出田舎家) (栗田常太郎)
三年中	S111228	小田原	益田孝別邸、掃雲台	(田舎家)	田舎家に上り着けば、以前に見し華人瓜の棚は片付けられて、畑の大根と柿の枝などに釣り上げられたる儘に干したる、物の詫び真の田舎の隠居の住宅よろしく(80)
三年中	S120108	伊豆長岡	原富太郎別邸、南風村荘	(田舎家)	伊豆特有の田舎家で(99)/打揃うて土間に足を入れ、招じらるゝまゝ大囲炉裡の間に打通れば、此所には焚火が燃えさかつてある。みんな安座して炉を囲み其まゝに重組に野菜類の御馳走が二三種あつたりと出た(99)/本席は西縁に添ふた長三畳、もとゝゝ物入れ位であつたのを巧みに仮用されたのである。(100)
三年中	S120108	伊豆三津浜	岡部長景別邸	(田舎家)	三津浜に、仰木氏の建築に成る岡部子爵の別荘を参観、実に能く出来てある。其附属の田舎家で魯堂老持出しの(102)
三年中	S120201	小田原	益田孝別邸、掃雲台	(田舎家)	更に田舎家に通れば、華人瓜を作られた跡は片付き、水菜が植ゑてあるが氷雨に濡れてゐる畑の景色も一入であつた。(109)
三年中	S120328	横浜本牧	原富太郎邸、三溪園	(田舎家)	此田舎家は伊豆風の家なれば南風村荘と同じ構へにて稍々家の大なるものあるのみ。(132)/南風村荘の茶室よりは一帖位広い席に入れば(132)
三年中	S120501	柳瀬	松永安左エ門別邸、柳瀬荘	本屋	春雨の烟れる田園の景色壮大にして如何にも雅味を帯たる田舎家 之に配するに奈良の古宝 (中略) 故団氏に御見せ致候はゞ如何に御喜びにならるゝや又如何に御批評せらるゝや(160) (藤原銀次郎)
三年中	S120507	柳瀬	松永安左エ門別邸、柳瀬荘	広間	寄附 広間(180) (既出田舎家)
三年中	S1205	柳瀬	松永安左エ門別邸、柳瀬荘	広間	五月〇日柳瀬荘の広間で(183) (既出田舎家)
三年下	S120523	名古屋春日町	鈴木邸龍門園	椎ヶ茶屋	椎の老幹を取り込みて野趣の極を写せる田舎家、椎ヶ茶屋(附録2-32) (栗田常太郎)
三年中	S120531	柳瀬	松永安左エ門別邸、柳瀬荘	広間	広間(191) (既出田舎家)
三年中	S120604	柳瀬	松永安左エ門別邸、柳瀬荘	本家座敷	薄茶終りて本家座敷にて懐石(193) (既出田舎家)
三年下	S120617	柳瀬	松永安左エ門別邸、柳瀬荘	広間	広間(4)/大囲炉裡の間(4) (既出田舎家)

三年下	S120623	柳瀬	松永安左エ門別邸、柳瀬荘	広間	広間(8)／大炉の間(9) (既出田舎家)
三年下	S120711	柳瀬	松永安左エ門別邸、柳瀬荘	母屋広間	母屋広間(11) (既出田舎家)
三年下	S120721	柳瀬	松永安左エ門別邸、柳瀬荘	広間	広間(14) (既出田舎家)
三年下	S120812	箱根木賀	塩原又策別邸	田舎郷士の住居	此家の造りの着古豪壮。如何にも田舎郷士の住居として伊吹山麓より移された此古屋が箱根に根を卸したもので、四百年前、賤ヶ岳の合戦には此家の主人も槍一筋と家来の十人も打連れて参加した面影が浮んで来る。(41)
三年下	S120820	柳瀬	松永安左エ門別邸、柳瀬荘	大萱葺の大広間	山上の仙境、大萱葺の大広間(附録2-35) (既出田舎家) (栗田常太郎)
三年下	S120825	小田原	益田孝別邸、掃雲台	(田舎家)・観瀾居	寄附の田舎家から見ると、観瀾居の前圃には芋を焼くてふ煙淡く立ち上り、寄附なる乾山焼芋の歌と共に、情趣溢るゝが如し。(54)
三年下	S121107	小田原	益田孝別邸、掃雲台	観瀾亭	古稀庵の新建築を見に行き、田中、仰木氏は故主公爵の造庭の妙を感嘆し、秋の山、流れのさゝやきを飽かず感賞され、予は森山さんと一緒に新建築を見物し、十二時隣りの益田邸田舎家に入った。(66)／観瀾亭前には今夏よりの浅流が出来、前圃の野菜も青々として小田原は秋も未だ若き感がある。(66)
三年下	S121227	小田原	益田孝別邸、掃雲台	(田舎家)	田舎家に入れば、大根は吊して柿の枝頭に在り、土間には吉例により餅搗きが始まって居る。(84)
三年下	S130109	伊豆長岡	原富太郎別邸、南風村荘	(田舎家)	田舎家には山籠に松ヶ枝と鎌とが挿してある。(93)
三年下	S130207	伊豆長岡	原富太郎別邸、南風村荘	村荘	炉辺の懐石(108)／煤光る床(108) (既出田舎家)
三年下	S130403	横浜本牧	原富太郎邸、三溪園	(田舎家)	本家の寄附に至り、更に東の田舎家の縁側から、雲とたなびく満山の花を眺む。(111)／田舎家の大炉のほりに打集ひ(111)／ゆつたりとした四帖の茶室に入ると(112)
三年下	S130407	柳瀬	松永安左エ門別邸、柳瀬荘	大家	一同は草葺の門より入られて大家の縁側に腰掛けらる。(114) (既出田舎家)
三年下	S130419	柳瀬	松永安左エ門別邸、柳瀬荘	本屋	寄付は本屋の縁。(116) (既出田舎家)
三年下	S130422	平林寺門前	松永安左エ門別邸	(田舎家)	平林寺山荘田舎家は、飛騨高山を距る二里の田舎にありし山家にて、もと七百年云々の事なりしが、足利末葉のものらしい。之は山中定二郎氏が買つて京都に移してあつたのを今春魯堂氏が買つたのを、譲受けて、魯堂氏並に京都の大工で平林寺の山荘に建てたる次第である。(127)

表2 『茶道春秋』に現れる「田舎家」

春秋下	S130923	小田原	益田孝別邸、掃雲台	観瀾居	観瀾居脇の寄附には(9) (本席は蝸殻庵) (既出田舎家)
春秋下	S13	横浜本牧	原富太郎邸、三溪園	(田舎家)	伊豆より移された田舎家が親しみ深げに我等を招いてゐる。炉辺でお食事を頂く。是は西郷さん夫妻の良い住居である。(13)
春秋下	S131203	京都南禅寺	野村徳七別邸、碧雲荘	(田舎家)	腰掛 田舎家(19)
春秋下	S140930	麻布永坂	三井守之助邸	(田舎家風の十畳の茶室)	本屋の洋間から南向の田舎家風の十畳の茶室に通れば、(中略) 炉縁には山家の棟なる鯉魚木の大晒れたるを用ひ、灰、炭のあしらひよろしく、駿河柴屋寺什物宗長所持の文福釜を、菊透し鉄野立五徳に掛け、方三尺の大炉の一隅に据ゑられたる風情は、此田舎家へ取合ふて面白し。(42)
春秋下	S150229	津	川喜多久大夫邸千歳山山荘	(田舎家)	田舎家の茶に案内さる。一大老松の下に在る葛屋、そも此松のために存在するのか、松は此草庵のために在るのか、渾然たる風流の一ト構へ。(60)
春秋下	S150301	千代崎	横山守雄別邸	聴瀾庵	老松数幹を屋敷内に抱へたる田舎家の一棟／物古びし萱葺屋根が老松に蔽はれ、海の風には数簇の葦竹にて護られたる古雅な庵室にぞ着きにける。げに一昨年鈍翁が来られて之をそっくり小田原に持って帰へりたいたと云はれたのも寔に首肯せらるゝ田舎家の逸物ではある。(61)
春秋下	S150310	鎌倉山	長尾欽彌別邸扇湖荘	(大田舎家)	大田舎家の内部を欧風に改め堂々たる別荘とした事を聞き(63)／逢着す大屋体に、主人「これは飛騨高山二里の奥に発見した九間に十一間総二階の山荘で、處の記念として天井は渋紙貼り、柱は巻いて保護しあって、容易に譲らないのを公会堂を寄附して漸く譲り受け、一部の改造と、更に混泥土の地下室を造つて古美術の展覧に宛てたので」と語る。氷裂風に磚敷ける外廊は勾欄も広う四周を巡り、大扉の上には「東海草樓」と物茂卿が額打たる。廻廊を東に歩むと、廓然として目路には湘南の島山、海光と共に入り、棲に迫る四周の小岳みな此山荘の領地とて一の民家とても見えない。(66)／二階の東部は大田舎家造りで民藝品が面白く配置され(67) (栗田常太郎)
春秋下	S150428	小田原	益田別邸、掃雲台	観瀾居	観瀾居の大炉の邊に座着くと(77) (既出田舎家)
春秋下	S150701	井の頭	吉田五郎三郎別邸	(田舎家)	広い屋敷の中には二三の葛屋葺きの田舎家があり、待合には本屋入口の土間を宛て(82)

春秋下	S150812	箱根強羅	松永安左工門別邸、白雲洞	不染庵・持仏堂	*耳庵老が、この程箱根強羅にある不染庵の席開きをされた。この不染庵といふのは、今を去る約三十余年前、故草郷氏が箱根に電車を敷設し、強羅を終点として大に其処を開発せんとするに当り、益田鈍翁の助力を求めた。なんでも新しい事には興味を持たれた鈍翁は、これにも亦大乗気で早速公園に面した景勝の地を選び、自分は此処に茶席を造らうとし、他の知友にも別荘地として買取りを勧められた。その頃、例の仰木敬一郎君は、築庭並に建築にかけては天下双ぶ者なき天才なりとの噂が高く、それには誰も異議はなかつたが、なに分同君は文人風の畑から茶道に入った人のこと故、所謂茶人の気に入らぬ所もあつて、その点は如何にも其通りだ、ヨシ俺が一番仰木君を教育して、茶庭茶席の立派な専門家に仕立上げて御覧に入れよう」と、大に意気込んで同君を呼寄せ、その由を懇々と伝えて、さうして「なんにも言はず、なんにも干渉せず、一切を挙げて君にお任せするから、この分譲地に本当の茶席と茶庭を造つて見よ、君の気に入るやうに存分にやつて見よ」と命令された。同君にしてみれば、これは願つたり叶つたりの有り難い仕合せで、天にも昇る心持はするが、なにがさて相手は斯界の大御所、三面六臂の大家だ。その上翁の周囲には有象無象の大小天狗が控へてゐる。萬一これに失敗でもすれば、入学試験に落第するも同然の結果となるから、その心痛一方ならず、昼夜を別たず苦心惨憺、有りたけの智能を絞りつくして、漸く造り上げたのが此別荘である。鈍翁一瞥、これを激賞し、直ちに本席を不染庵、寄附を白雲洞と命名し、茶席開きの茶事その他よろしくあつて、仰木君の手腕力量を宣伝せられたから、同君も大に面目を施した。仰木君にとつては、これが茶席として処女作といふべきものであり、また登龍の門ともなつたのであるといふ。(205)／本席不染庵(206)／席を転じて持仏堂に入れば、床はなく、床裏に三溪翁遺愛の天平の聖観音像を安置し(207) (類似例) (藤原銀次郎)
春秋下	S150917	名古屋田代町	森川勘一郎別邸	(田舎家)	田舎家造りの風雅な一構へ(85)
春秋下	S150919	名古屋八事	高松定一別邸	唐櫃庵	*八事山の秋陽懐しく、草の家を染め (90) (類似例)
春秋下	S160126	箱根木賀	塩原又策別邸	(田舎家)	田舎家の六畳に通ると四尺四方の大炉を切り(101)
春秋下	S160201	横浜本牧	原邸、三溪園	(田舎家)	三溪園内田舎家の西郷さんが居(105)
春秋下	S160202	葉山	仰木敬一郎別邸 (森戸旧宅)	(田舎家)	森戸魯堂居の旧宅に辿りつくと、いかにも落ちつきのある蟹の伏屋とも眺めらるゝ田舎家である。(106)
春秋下	S160202	葉山	仰木敬一郎別邸 (新居)	新構	*森戸神社より海岸を遠回りして数丁を距てた新構に辿りつくと、庭も家も一切新らしく入手した工作でありながら、斯道老巧の大家だけに寂十分に匠気を見ない一構、通されたるは二畳向切ともいふべき小間に手取の釣金いかにもうち侘たり。古石炉、やつれ炉縁、席うちの枯淡なる、鈍翁田舎家の佐びも是にはしかと迄に思はせた。(107) (類似例)
春秋下	S160610	千代崎	横山守雄別邸		鈍翁が「出来るなら此庵と此老松とを一緒に小田原の海岸へ持ち運びたい」と云はれたといふ程の、龍幹の翠蓋に擁せられた玄関から(131) (既出田舎家)
春秋下	S160610	千代崎	宮又一別邸	(田舎家)	十数年前より此千代崎に田舎家を造り、業余に蒐められた民藝品は庫に溢れて、数軒から成る田舎家は神棚、ふろ棚、籠、台所、押入など其一切に何れも郷土味豊かな器具調度が置合はされ、下手物の粋を載いたる草の家であるが、吾々は牛を追出して外の用途、即ち寄附に使ふとか応接間に改造するとか考へるのに、宮氏は昔ながらの牛部屋で門が入り、暗がりから牛が首を出して飼桶に突きこまんとしてゐる所で、それが煤びた実大の木彫といふ徹底振りといふ蒐集力には驚かされた。(132)
春秋下	S161017	柳瀬	松永安左工門別邸、柳瀬荘	母屋・自在軒	田舎家に到れば、掃き清めて一塵なし。茅摺深く葺き下げて、障子の紙いよゝゝ白く、朝陽に面して気先づ晴る。煤けたる構へは、もと大庄屋の旧宅と聞きて首肯せらるゝが、床に玉室和尚筆旦鶏画賛を掛けて田舎家の気分をそゝる。／秋晴れに牛勢抜く手の力哉田舎家の茶の出来のよろしも／母屋の大玄関より迎へて、書院の次の間を寄付としての設なれば(212) (横井半三郎)
春秋下	S161031	京都	陽明文庫	(田舎家)	一行は山上の田舎家に登り、都の秋色を賞す。此田舎家は越前鯖江に在りて新田義貞の居館であつた其一部であるといふ。(192)
春秋下	S161123	柳瀬	松永安左工門別邸、柳瀬荘	閑室・耳庵・春草庵	*当日の寄付は、表門寄りの竹藪の上、小門を潜つて登つた処の閑室といふ狐屋で(208)／以て主人片田舎陋屋の趣を利かせる適り役の一軸(209)／夕暮となつたが此席からの眺めは又格別で、低く、見える柳瀬川の土堤を越えて森又山の遠景、冬日の夕照、畔に立つ田夫、車を牽く野人、増産を土地にいそむ田家の模様手に取る如く見違かにされて、鎮守の森の鬱として偶々白鷺の飛び行くが風流の点描となつて、坐して武蔵野の縮図を展覧したのである。(210) (類似例、景観描写) (藤原銀次郎)
春秋下	S170721	箱根強羅	松永安左工門別邸、白雲洞	持仏堂・不染庵	*持仏堂には石山切の瀧の歌を掛け、二三の花筒に野草を挿す。終て不染庵一畳台目向板丸炉に手取釜でお茶。(165) (類似例)
春秋下	S170725	箱根木賀	塩原又策別邸	(田舎家)	煤光る大田舎家(166)
春秋下	S170805	箱根木賀	塩原又策別邸	(田舎家)	江州賤岳山中の郷土の一構なりし面影の田舎家(163)

表3 『わが茶日夕』に現れる「田舎家」

日夕	S171109	名古屋八事	八勝館	千松庵	烟細くのぼる田舎家千松庵／本席に入ると納戸と覚して此長四帖の壁床(165)
日夕	S191204	京都大宮玄琢	土橋嘉兵衛別邸、玄琢山荘	(田舎家)	山荘入口右の田舎家で耳庵主となり(235)
日夕	S210527	京都西加茂	醍醐別邸	(田舎家)	醍醐侯の宗和好田舎家(328)／(『日本の茶道』S2110より転記として)別邸の母屋は南向きの葛屋葺きで軒先きが瓦で入母屋平入、間口が六間半、奥行が三間半の平屋です。茶室は囲ひで其西の端にあつて、ゆるい丘の裾にあたる所の脇掛窓を開くと、眉に迫る川上山の樹々の幹が立並んで眺められる。外観は田舎家としか見えないが、内部では玄関、入側、座敷、茶室、控の間、物置など実に巧妙を極めた分割法で、襖建具の全部を取り外すと、一部に僅かな壁付があるのみで、一つのガランドウの大座敷となります。それが最も大きい特徴です。 茶室は長四畳で次の間が鏡天井、其前の三畳の天井は油竹の網代組、松の丸太の細いのが竿縁となつてみて中には先の方が二又になつてあるといふ侘びなものもある。手前畳の上は落し天井、炬は向切、下座床です。襖の引手は「月」の字、次の座敷は「の」の字で、之は桂の御所と同じ手の物です。建物の全体の気分は、百姓家を公卿や殿上人にも心よく住み得る様にといふ工夫と、どの様にして囲ひを作るかといふ二つの面に課せられたる問題として無比の答案を与へられてあるといふことに頗る意義深い存在です。(330)
日夕	S210601	名古屋八事	八勝館	千松庵	田舎家の大床には庵主自慢の古織作一重切に夕顔のかそやかに咲けるが一輪。くすんだ壁に添ふてつゝましく。長四畳の小間には(342)
日夕	S240426	奈良多門山下	河瀬虎三郎邸	(田舎家)	私は七八年前に柳生老にさそわれ(中略)その折は神戸住ひの河瀬君に頼まれて、艦がての隠棲所なり茶席なりに、柳生老が古き田舎家の移築や、露地や茶室の築造をして居られるのを見に来たことがある。奈良在の郷士の小建築と、柳生好みの渋み露地作りに限りなき愛惜を感じた。(290)／田舎屋風の土間から上り、南向き寄り附に通れば(291)
日夕	S240530	名古屋八事	八勝館	千松庵	三十日午後は田舎家で豊田利三郎翁森川如春庵、高橋蓬庵、横井三王と私に茶事があつた。(353)／以前は老の此田舎家の茶には大侘びな面白い茶が多かつた。それは魯山人の影響や、横山五郎君などの千代ヶ崎田舎家茶風を取入れて御本人の素人の染まざる純情茶であつた。(中略)別に本館に近き小間も露地、腰掛も揃つた本式茶室があることであるから。此田舎家と違つた茶略で、丈夫の名器、名品を生かして濃茶の一席を催ふして下さることを切望する。(355)
日夕	S2108	北鎌倉	北大路魯山人別邸		*何とか闇とか云つた大萱葺の古建築の広間に入ると(247)(類似例)

『わが茶日夕』では年月日、場所、人名のいずれも省略されていることが多く、これらはこれまでの他の茶会記等から判断した推測を含む。